



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一〇八号(二日発行)
平成十年九月一日

年表で読む

古平の歴史

《16》

■全国で戸籍の作成

開拓使出張所の仕事は、一般事務と戸籍が主な仕事でした。

明治四年、戸籍法が公布されて、翌明治五年(二七三)、わが国で初めての全国的な戸籍がつくられることになりましたが、この年が、干支(えと)でいうと壬申(みづのえ)にあたるので、壬申(みづのえ)と戸籍といわれました。

しかし、この戸籍には身分や職業などのほか、種族や犯罪歴まで書かれていたことから、この戸籍は、後に焼却処分にされました。

■大・小区制に変わる

明治七年(二八四)になると、札幌本庁管内の石狩・後志・胆振の各国に、大・小区制がしかれることになりました。これによ

って、古平・美国・積丹の三郡は第五大区となり、古平郡の内、沖村・歌棄村・沢江村・浜中村が第一小区、入船町・新地町・垂美村(港町)・群来村が第二小区となりました。

また、美国郡は第三、第四小区、積丹郡は第五、第六小区となりました。

■古平郡の戸数と人口

明治十年(二八七)、古平郡(第五大区)の人口調査が行われました。

古平郡第一小区

沖・歌棄・沢江・浜中村

戸数 一八〇戸
人口 五八一

男 三〇五人
女 二七六人

同 第二小区

垂美・群来村・入船町
(新地町を除く)

戸数 一三九戸
人口 四四七

男 二三八人
女 二二九人

古平郡古民(アイヌ人)

戸数 二〇戸
人口 九五

男 五一人
女 四四人

■船改所(ふねあらたし)

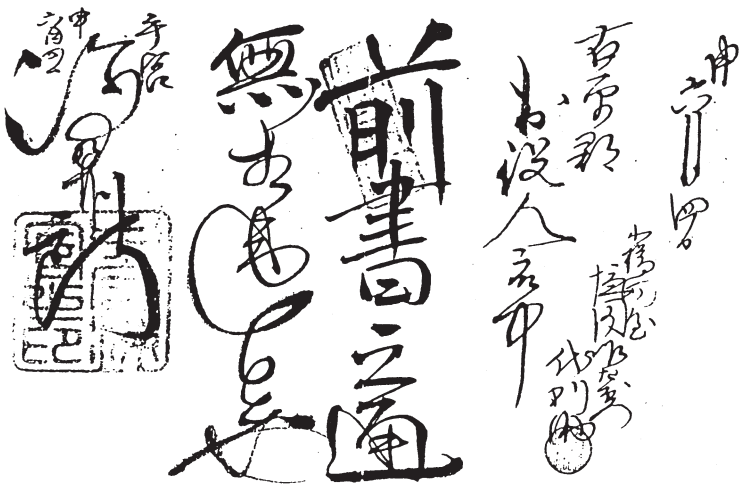
松前藩のころからの沖口(おきのくち)役所にならって、明治五年にこれを海官所と改称しましたが、同年に海関所とまた改称しました。古平に入ってくる船はどこかの海関所に必ず寄って、荷物に対する税金を払わなければなりませんでした。そして、明治八年には、さらに船改所と改称されました。

■浦役場(うらえきば)

明治十年、室蘭から日本海沿岸にかけての西地に、十二か所の浦役場が

置かれることになりました。小樽・余市・古平・美国・積丹などです。最初は戸長や副戸長が兼務していましたが、その仕事は停泊する船についての事務や、難破船の処理でした。浦役人心得には、難破船の処理に当たったの給料や雇い人の賃金などが定められていました。

右の文書は、小樽問屋・塩田作左衛門が送った荷物について、手宮海関所で納税が済んだという証明書(積荷名は省略)



今ではまったく聞くこともなくなつたものに拍子木(びしき)があります。芝居でも見に行かなかつたら、まず聞くことはないでしょうね。私にとっては、昔を思い出す懐かしい音です。

私は鯨場育ちで、小さい時は母や姉たちが鯨番屋のご飯炊きをしていたものですから、物心ついたところから、ご飯時になると決まって拍子木の音を聞いていました。

拍子木といえば芝居の幕の開け閉めの時や、夜回りの人が使

むかしの娯楽は でも楽しかった思い出

渡辺 ハツエ

お盆も終わりホッとすると同時に、夏の終わりを感じて一抹の寂しさはいなめません。

今年も、二度目の敬老会のお招きをいただきました。いつの間にか私も、昔を語る齢になっていることに気づきました。

私たちの若いころの娯楽といえば、名前も古めかしい活動写

うものでしたが、番屋ではご飯時の合図に使っていたのです。

ナラやクリなどの硬い木で作られていたそうですが、とてもよい音を出していました。リズム

拍子木

竹内 コト

た、急いで持ち場に戻り仕事にかかります。

拍子木はふだんは誰でも見える、台所の手の届くところに掛けて置きます。拍子木というの

をとるように打つと美しく響きます。拍子木が鳴ると、若い衆がどやどやとわれ先にと飯場に入つて来ます。食事がすむとま

は長方形で、先端に穴をあけそこに丈夫なひもを通します。永年、へっつい側の側に掛けて置くせいかびかびかに黒光りしてい

て、大人も嬉々として夜中までも踊っていたものでした。私はもっぱら、見る阿呆、のほうでしたが、ずいぶんと楽しかったものでした。

真ぐらいのものと思っていまして、私が思うには、盆踊りもりっぱな娯楽だったのです。昔の盆踊りはそれはそれは盛大な賑やかなものでした。山口さんの鯨の干場であつた通称④の干し場では、時間が経つにつれて踊りの輪が二重三重に広がり、大人も子どもも大勢集まつて来

また、お墓参りをするのも変ですが娯楽みたいなものでした。お盆中、雨の降らない限りは一日も欠かしたことはありませんでした。八月も中旬ともなれば日の暮れるのも早くなり、その当時は街灯もなく、帰りは暗くなっていました。港町の通称「男石女石」といわれた所の

で、へっつい煙でまるで木の薫製のような音です。よい音を出す拍子木は、ときには楽器の代わりもするようです。本当に昔の人はよく考えたものですね。また、昔は夜回りの人も使っていて、静かな夜、そして風の夜や吹雪の夜など、四季を通じてあの音が聞こえていました。

ときどき、とんでもないことを思い出しては書いてみたくなりますが、相撲の放送を聞いていてふつと思ひ出すことがあります。

覆いかぶさるような崖下の道を、遙か沖合いのイカ釣り漁船の漁り火を見ながら、そして、そこにいるはずのわが家の若宮丸の大漁を祈って帰りを急いだものでした。

そのころ「コックリさん」といって、お稲荷さんに願いごとをする遊びがはやっていました。半紙にいろは四十八文字を書き、半紙の四隅にお稲荷さんの鳥居を赤く書いて、箸を二本組み合わせたものを手に持ち、

← (次ページ目へ続く)

追憶の記

①

[48]

橘 義 春

昭和十二年の春、古平小学校高等科を卒業すると同時に仕事を求めて、東京ふるびら会の初代会長であった河原木源治様を頼って、西も東もわからない東京サ出た。田舎者の私には、見るもの聞くものみんな珍しく、たいしたタマゲタもんだ。

私の勤務先は東京の麻布区で、近くに六本木があり、それに盛り場の麻布十番通りがあり、毎晩夜店が並んで、当時の古平町のお祭りで新地町周辺の人出と同じくらい、大勢がそろぞろと歩いていた。毎晩仕事が終わって銭湯からの帰りに、十番通りを先輩たちと夜店を見て歩くのが何よりの楽しみであった。

商店街にはレコード店が三軒あって、毎晩のようにどこかの店から歌声が流れていた。

それがとても哀愁のある歌で、毎晩聞いているうちにいつの間にか歌を覚えてしまった。何しろ古平の漁師の家には、吉幾三の歌ではないが、

俺の家にはラジオもねえ、蓄音機もねえ

でナ生活だった。それでも電灯だけは夕方になるとパツと点灯し、朝になるとパチリと消えてしまう。まあ考えようでは、手間のかからない便利な生活？ だったかも知れないし、今の世の中だったら省イネに貢献しているとはめられるかも知れない。

子どものころから歌は好きだったが、古平で暮らしていたのでは、今、世の中でどんな歌が流行しているのか——なんてことは全然わからなかったろう。レコード店の前で先輩から、

いま電蓄から流れている歌の題名と歌手の名前を覚えてもらったら、曲は『別れのブルース』で、歌っているのはおなごの歌

手で淡谷のり子といって、なんでも、ブルースの女王、といわれているそう。情感のこもった悲しげな歌いっぷりが気に入り、いつの間にかその淡谷のり子のファンになってしまった。

昭和十五年ころだと思いが、近くの芝公園のそばに芝園館というシャレタ名前の映画館があって、そこで淡谷のり子の実演と映画二本立てがあると、電柱の立看板があった。淡谷のり子のファンとして、東京にいてもこんな機会はなかなかないので、なにが何でも行ってみることにした。

その日は日曜日だったので朝早くから入口に並んで入館し、一番前の席のかぶりつきに陣取った。

最初に映画が上映されたが、そんな映画はうわなどの空で見ていた。映画が終わわり、いよいよ淡谷のり子が舞台へ登場となった。ファンの拍手と大歓声に

(前ページより続く)
半紙の上で自分の願ひごとを話しかけるのです。

私はある朝、出漁してた若宮丸のことをたずねました。家族の見守る中で例の半紙を広げ、「コックリさん、コックリさん。若宮丸は今、どの辺まで帰って来ましたが。」とたずねましたら、箸を持っている手が動いたのです。箸は『ヒクニ』と三字を指しました。私が、意味がわからないと言うと、側で見ていた陸廻りの若い衆が「それはびくにだ。美国沖まで来たんだ」と言って、リヤカーを引いて築港へ行きました。

すると、それから間もなく若宮丸は家の前浜を通って築港へ入りました。
私のあいまいな記憶で綴ってみました。

◆
迎えられ、ニッコリと笑顔で軽く会釈してファンの声援にこたえた。演奏は淡谷のり子とその楽団で、感じの良い洗練された楽団だった。

大正一一年

10/22 発動機船で余市へ出て俱知安へ行く。二時頃着き共進会場へ行つたが賑やかである。夜、芝居を見て宿屋に泊つたがどこも満員である。

10/2 農園では大勢の出面を入れてリンゴもぎをする。因果応報で、肥料や手入次第で見事なりンゴになる。帰ってから小樽新聞を見ると共進会の成績が出ていた。一号が三等賞であつた、ほかに古平では伊藤さんの国光と一号が三等賞、梅野の旭も三等賞、一、二等は全部余市に占められた。家ではそのほか二種類が四等賞、古平としては上等だ。

10/29 夕食後、役場宿直室に米田さんを訪ね、共進会の模様を聞く。古平では家と伊藤さんが成績が良かった由、実に祝うべきことだ。これも父が刻苦精励の賜物と感謝せねばならぬ。

10/31 大正と改元して第一回目の天長節、小学校では遥

拝式、夜、ちようちん行列をする。土谷座では大阪名題片岡崎之助一座が来て、近頃になく大芝居だ。大人二十五銭

11/2 禅源寺にリンゴを供える、困で植えた松苗が沢山ある。十年後は見事だろう。

11/7 本陣の浜には川崎船が四隻入つていて、リンゴをかついで積んでいる。

11/9 今朝、畑に仕掛けたネズネ落としにイタチがかか

高野名幸作さんの日記から

當時の世相を見る

【9】

つていた。

11/11 今日初めてストーブをたいた。たき火のように煙らずあつたかくて、冬はこれにこしたものはない。

11/13 夜、田畑君に誘われて西説教所へ本山からの布教師の説教を聞きに行く。大いに得るところあり。

11/23 軍事講演会があるというので、一時に小学校へ行く。函館連隊区司令官五十嵐

中佐の講話である。三時に終わる。

12/1 共進会の三等賞の賞状と賞品が届いた。賞品は目覚まし時計で、時計は珍しいので家中大喜びであつた。

12/3 夜、学校で通俗講演会がある。町長、校長、署長、正隆寺さんの講話がある

12/16 古平町漁港調査のため八月中旬、道庁から出張して来ていた駒嶺技手が、調

査が終わって事務所を閉じた。同技手の話では、港町五番地の浅瀬を埋め立てて土場を建設し、築港は入船町の方向に突き出す、工事費は尺当たり約三百円で、土場費とも約四十万円を要するとのこと。このうち地方費からの補助は三分の一あるので、古平町で負担するのは二十万円余り、また、これで廃止になる鯁建場は四、五統である。

九月一日 晴 六十六度F

永らくのあれも漸く晴れ上がった。起床早々幸治を(おんぶして浜ひ(へ)出てみる。朝夕は涼しい程になった。海は上なぎ、④の漁場の方には去る二十七日の大時化に遭難したアイノコ船が一艘浅瀬に上つて居る。共同の浜にはりんご積川崎船入港して居る。聞けば予の家から買ふた武川等、小樽行四千斤程積み込んで今日中に出帆するのだとの事。久し振りの天気故、錫製造連中は皆干して居る。丁度、鯁場のナヤの様だ。帰りて中食、父、伊三郎君例の通り。予は午后久し振りで新地銀行に行き預金す。帰りは三時、五時頃農園行、父等は石をカズキ(かつぎ) *1荒木起こしをやって居る。武川等は五八号もいで盛んにカツエデ(かついで)居る。母も来り*2大根すかしやる。予は芋を手かご一つ程掘る。田園生活も気楽で面白い。落ちりんき拾ひに上の畑け迄見廻り、丁度ランプ付たに家に帰れた。幸治、おとちゃんが

煙けから

りんきや

らイモを

持つて来

るのだと

喜んで待

つて居つ

た。

八時、一

同楽しく

夕餉を済

ませた。

*1 荒れ地

を起こす

開墾

*2 間引き

九 月

日 一 月 九		こ	月
日 一 月 八 舊		こ	月
天 氣	寒 暖	信	
晴	寒	信	
九 月 一 日		信	
九 月 二 日		信	
九 月 三 日		信	
九 月 四 日		信	
九 月 五 日		信	
九 月 六 日		信	
九 月 七 日		信	
九 月 八 日		信	
九 月 九 日		信	

(年九卅)會開會連共二五＝京東 (年九卅)放開連大

あとがき

▼余白を利用して——曆の上では確かに夏はありましたが、サッパリ実感のないうちに秋風を感じるようになりました。長期予報では今年の冬は早いとか。▼楽しみにしている方もいるようですが、短歌・俳句は原稿がまとまらないでお休みです。▼要望のありました日記、原文で一ページ分載せました。▼丸山町の薦根さんから、古平町全景写真をいただきました。ありがとうございます。▼『古平の方言』三五〇部印刷しましたが、現在、十部ほどになりました。続いてのふるさとシリーズ第二集は『観音滝ものがたり』を予定しております。ご愛読ください。

北 政 道

石 井 愛 子

渡 辺 ハ ツ エ

恋一つしてはならない夫婦道

盆の月一穂さんの詩が浮かぶ

束の間のよろこびくれて孫帰り

日溜まりの二人がはずむ大正っ子

大国の財政苦し世紀末

我も老い亡母の良く似たくの字型

老夫婦三步下がった過去の事

なじまない小淵政権先不安

ふるさと歳時記

古平青年会の群像

古口 川 義 雄

人恋し真昼の里は蝉しぐれ

加工場での仕事も飽きたのか
いやになったのか、日盛りの中
を本間正次郎君が物憂いく歩い
て来て、開口一番「いつたい、

世の男性達は、みんな何処に行
ってしまったんだろう……」戦
後も、十年近く経つと、あれだ
け集まって来た人達も急速にこ
の町から散り始めていたし、夏
ともなれば、すけそう漁の発動
機船も、その大方が出稼ぎに出
て行つて、船人澗の中はチ力釣
りの子供達だけしかない。

昔から、観光客の来る町でも
ないし、第一、住んでいる者が
コレと誇るものなんか知らない
のだからのどかである。

人想う夕日の噪ぐ潮だまり

「オイ、そろそろ皆な集まらね
べが……」

淋しさを代表して、吉野浩次
君が、古平青年会の招集を促
す。議題なんかどうでもいい事
なのである。

しかつめらしい顔をして、尤
もらしい理由を並べて、消防番
屋の二階を借りてしまえばこつ
ちのもの、若手の上山忠義君や
山野富生君の、上手な歌に合わ
せて、いつの間にか斉藤嘉勝君
がエロチックな身振りで見事な
踊りを披露する。

久保田洋子、啓子の姉妹が田
中栄子さんと抱き合つて笑い転
がっている。

常は、謹厳な副会長の竹本紅
子さんも、「おホホ、おホホ」
と笑いが止まらなくなつてい
る。

ふるさと古平のことを、キザ

な言い方をすれば、一日たりと
も忘れたことはない。どうして
と聞かれても、一言で片付く返
事なぞ持ち合わせはない。

古平で、私が生れ育つた年月
はせいぜい十五年。ふるさとを
離れて札幌の書店勤めが七年、
引続き海軍にとられて三年余。
合せて十年程の空白を埋めるた
めに、再び生きて、定期船から
ひらりと故郷の土に飛び降りた
感激は一生忘れまい。

父祖の墓 蛇追い払い香を焚く
「会長さん、たまに、うちさま
てけれねべか……」幹部の一
人、大地友江さんが、私に來訪
を促す。青年会の女性会員の
内、彼女の洋裁教室には、有力
な人材が多く通つていて、いわ
ば一派をなしていたから、私も
むげに断ることは出来ない。

何か文句でも言われるのかと
こわごわ訪問すると、先刻顔な
じみの、彼女の両親が、私を、
息子でも来たように満面笑顔で
迎えてくれ、何のことはない、
始めから終りまで青年会をベタ
ほめされ、おまけに代表してご

馳走をいただく晩になった。
札幌に嫁したという友江さん
の訃報を、風の便りで聞いてか
ら、いったい何十年経つてしま
つたのだらう。

今の札幌と、その近郊には、
随分と古平衆が集っているし、
いざとなれば、その絆は強い。
風の匂いや、海の呼び声。山
が人を包み、川がささやく、花
が微笑み、月光が波間で弾む。
横なぐりの吹雪と、牙をむく怒
涛から、たくましさと優しさを
教わつた。それが国衆であり、
同じ四季の移ろいの中で、それ
と気付かぬうちに密着した、古
平衆となつたに違いない。大事
にしたいものだ。

ススキノで 訛声高 古平衆



――稲倉石の思い出――

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

初めて北海道に来て

どってんこいだこと

[11]



私が初めて北海道（稲倉石）に来たのは、昭和二十八年の二月、二十二才の時だった。

その頃、北海道といえば遠い遠い未知の地という感じだったし、内地と北海道をさえぎる津軽海峡の「しよっぱい川」の向こうは、異郷の地という思いすらあった時代だった。

東京には、年に十数回は出張していたので出張慣れしていたつもりでも、稲倉石への出張を命じられた私は、何故か何時もと違った興奮で満員の夜汽車の客となった。

深夜に雪の舞う青森駅に着いた私を驚かせたのは、汽車から降りた乗客が、我先にと一目散にプラットホームを走り出した異様な姿だった。

何事か分からないまま後を追ったが、行き先には青函連絡船の「乗船口」と書いてあった。

一刻も早く乗船し、横になれる良い席を確保しようという事だったのです。

もの悲しく響くドラの音とともに、星ひとつない真つ暗闇の海に出た連絡船は、遭難するのではと思う程に大きく揺れ、猛

吹雪が三等室の小さな丸窓を容赦なく叩きつけていた。

ようようの思いで函館棧橋に着いたとたん、再び列車までの走り出しが始まったのです。

座席を確保した私は、横なぐりの雪が音をたてて突き抜けるプラットホームに降り、北海道の厳しさを知った。

耳がちぎれそうに冷たい。いや、冷たいというよりは痛いという感じだった。夜明け前の函館はまだ暗く、雪にうもれたまま眠りから覚めていなかった。

汽車は吹雪をさえぎるように出発した。乗客の大部分は、大きな荷物を抱えた行商人らしき男性で、申し合わせたように分厚いオーバーの襟を立て、亀の子のように頭をうずめていた。

吹雪がうず巻き、大きな雪の塊が音をたてて車窓を叩きつける中を、汽車はあえぎあえぎ進んで行った。車内の暖房はさして効果がなく、足が冷たい。

ガタンコ ガタンコ 問延びた音が体に響き、車窓から冷たい隙間風が突き刺さってくる。

長万部を過ぎ、羊蹄山・ニセコ連峰にさしかかる頃、雪の猛威は一層激しくなった。

線路の両側は、汽車の高さまでに積み上げられた雪で、景色など見るべくもない。先方に雪崩でもあったのだろうか。汽車は何べんも何べんも停車した。今まで

ガタンコ、ガタンコと聞こえていた音がドッコイショ、ドッコイショと聞こえる。この付近は北海道でも特に雪の多い所らしい。

汽車に据えつけられたストープでは、遅い道産子たちが雪で濡れた靴下をあぶり、車内にムツとする異様な匂いが漂う中で、スルメや燻製を焼き頬張っていたのもこの辺りだった。

こうして、ようやく余市に着いた私を待っていたのは、陸の孤島といわれた古平（稲倉石）までの、数時間に及ぶ猛吹雪と寒さとの格闘だった。

今では当時のことを偲ぶべくもないが、私には北海道を初めて知った印象として、今も強烈に頭に焼きついている。

平成8年・1998

⇒ 30年前 ⇒

昭和43年・1968

古平町の住民の生活状況調査から

古平町では統計調査条例を制定して、開基百年を迎えた昭和43年から46年まで、町勢の実態を明らかにすることと、町民生活の状況を知ってそれを行政の資料にすることを目的として、無記名による統計調査を行いました。

それから、今年でちょうど30年目になります。当時の住民の生活実態はどうだったのでしょうか。いくつかの項目についてみてみましょう。

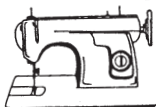
各町内の戸数と人口（昭和44年）

町内	戸数(戸)	人口(人)	町内	戸数(戸)	人口(人)
沖村	53	218	泥の木	18	92
沢江村	127	544	廻り淵	12	55
浜1	110	423	稲倉石	133	453
旭	178	685	港町	175	797
中央	151	565	新地町	116	506
銀座	117	468	入船町	56	272
浜5	108	473	本町	135	630
清住	117	492	丸山町	195	839
本陣	51	192	群来村	14	60
栄	20	102	御崎町	39	164
鴨居木	23	92			

合 計 1948 8122

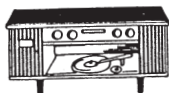
項 目 の 集 計

トラック 130
乗用車 107
軽四輪車 51



バイク 248
自転車 1610
ミシン 1354

編み機 819
カメラ 652
カラーテレビ 86



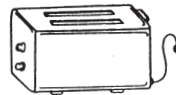
白黒テレビ 1842
ラジオ 1026
ステレオ 286



乗 用 車
18戸に1台



カラーテレビ
23戸に1台



トースター
4戸に1台

冷蔵庫 891
洗濯機 1306
掃除機 640



扇風機 176
ルームクーラー 4
温水器 37

湯沸器 84
ミキサー 130
ジューサー 123



トースター 499
電気釜 631
アイロン 1574



電気掃除機
3戸に1台



カ メ ラ
3戸に1台